一条氏館跡遺跡

――第２次・第３次調査報告――

1991

山梨県三珠町教育委員会

序

本報告書は、三珠町歌舞伎文化公園増設工事に伴い、平成２年度に試堀調査された西八代郡三珠町一条氏館跡遺跡について、その成果をまとめたものです。

現在三珠町では、歌舞伎文化公園の北側に、総面積20,761㎡の公園を増設中です。その全域を対象に、山梨県教育委員会文化課と山梨県埋蔵文化財センターの指導監督のもと、塩山市教育委員会の堀ノ内泉氏の指揮により発掘調査を実施しました。

試堀は25メートル間隔のメッシュに約２メートル幅のトレンチを掘り、全貌を察知しようと試みました。

それによりますと、数多くの方形周溝墓や土壙、住居址や古墳等の貴重な文化遺産が確認されました。ともあれ、平成３年度の本発掘の指針になり、その全容がやがて解明されるものと期待されます。

７月から予定される本発掘の準備も着々と進められている折から、文化財を保存しその活用を図って国民の文化的向上に資し、世界文化の進歩に貢献する事ができるものと思います。

末筆ながら、ご指導ご~~強力~~協力を賜った関係各位、並びに直接発掘に当たられた皆様に改めて厚くお礼申し上げます。

平成３年３月

三珠町教育委員会

教育長　小　林　君　男

例　　言

1、本書は山梨県西八代郡三珠町上野字一城林に所在する一条氏館跡遺跡の第２次・第３次調査報告書である。

2、一条氏館跡遺跡はこれまで３度調査をされたことになり、同一遺跡と見なせるために便宜上「第１～３次調査」と呼称する。それぞれの調査原因、調査年月は以下のとおりである。

第１次　「三珠町民文化資料館」建設のため　昭和62年８月
第２次　資料館隣接地（歌舞伎公園内）公衆トイレ建設のため　平成２年２月
第３次　「歌舞伎公園（仮称）」造成に先立つ遺跡分布確認調査　平成２年12月

3、調査組織、調査参加者は本分中に記した。

4、本書の執筆は、第２次調査を清水博（櫛形町教育委員会）が、第３次調査を清水および堀ノ内泉（塩山市教育委員会）が担当した。

5、発掘調査から報告書作成まで、次の方々からご指導・ご助言をいただいた。記して謝意を表する次第である。

坂本美夫・長沢宏昌（県教育委員会文化課）、末木健・中山誠二（県埋蔵文化財センター）、萩原三雄（山梨文化財研究所）、斎藤修二（八代町教育委員会）、岡野秀典（豊富村教育委員会）

6、本書に関する資料（出土品、図面、写真等）は一括して三珠町教育委員会で保管している。

目　　次

序
例言・目次
Ⅰ　遺跡周辺地域の環境
　1、地理的環境……1
　2、歴史的環境……1
Ⅱ　第２次調査
　1、調査に至る経緯と経過……4
　2、遺跡の位置……4
　3、調査の成果
　　(1)　検出された遺構……4
　　①　１号方形周溝墓……7
　　②　２号方形周溝墓……7
　　③　３号方形周溝墓……7
　　④　４号方形周溝墓……7
　　(2)　出土した遺物……7
　4、小結……8
Ⅲ　第３次調査
　1、調査に至る経緯と経過……9
　2、遺跡の位置……9
　3、調査の方法……9
　4、調査の成果……10
　　(1)　検出された遺構……10
　　①　方形周溝墓……13
　　②　住居址……13
　　③　溝……13
　　④　古墳……13
　　(2)　出土した遺物
　　①　土器・石器・その他……13
　　②　古墳出土鉄製品……17
　　③　古墳出土装身具……17
　　④　試掘坑内出土鉄製品……18
　5、小結……19
Ⅳ　まとめ……19

挿図目次

第１図　遺跡周辺地形図（１／2,000）……2
第２図　周辺遺跡分布図（１／50,000）……3
第３図　第２次調査遺構平面図（１／80）
　　土層断面図（１／40）……5・6
第４図　第１次・第２次調査区配置図……5・6
第５図　第２次調査 出土土器（１／３）……8
第６図　第３次調査 全体図（１／ 1,500）……10
第７図　第３次調査 遺構平面図１（１／300）…11・12
第８図　第３次調査 遺構平面図２（１／300）…11・12
第９図　古墳石室平面図（１／80）……14
第10図　第３次調査　出土土器１（１／３）……15
第11図　第３次調査　出土土器２（１／３）……16
第12図　第３次調査　出土土器３（１／３）……17
第13図　第３次調査　出土石器（１／３）……17
第14図　試掘坑出土　古銭（１／１）……17
第15図　古墳出土　鉄製品（１／３）……18
第16図　古墳出土装身具（１／２）……18
第17図　試掘坑出土　鉄製品（１／２）……18

Ⅰ　遺跡周辺地域の環境

1、地理的環境

一条氏館跡遺跡は西八代郡三珠町上野字一城林に所在する。三珠町はほぼ三角形状を呈する甲府盆地の南西縁にあたり、富士川をさかのぼって甲府盆地に入りわずかに北東へ進んだ位置に存在する。町内は地形的には大きく３つの地区に区分される。丘陵地帯の大塚地区、芦川の扇状地を中心とする上野地区、芦川峡谷に沿った山地の下九一色地区に分けられるが、概して山地がその大部分を占めている。

遺跡ののる上野地区の丘陵は、数多くの遺跡や古墳が点在し考古学研究上重要な地である曽根丘陵の南西端に属する。曽根丘陵は甲府盆地南縁に、御坂山地からベンチ状に張り出してほぼ東西に続いている丘陵である。その標高は300m前後で山地から流れ出る小河川によって幾つかの小台地に開折され、丘陵下には笛吹川が寄り添うように流れ氾濫原を形成している。

本遺跡はこの曽根丘陵の南西端にあたる上野地区の小台地に占地している。この小台地は北西方向に伸びる小規模な舌状台地でその標高は280～290mを測り、盆地面との比高差は40mほどを有する。

台地の眼前には甲府盆地が広がり、その北方には八ケ岳を、さらに西方には南アルプスの山々が眺望できる位置にある。

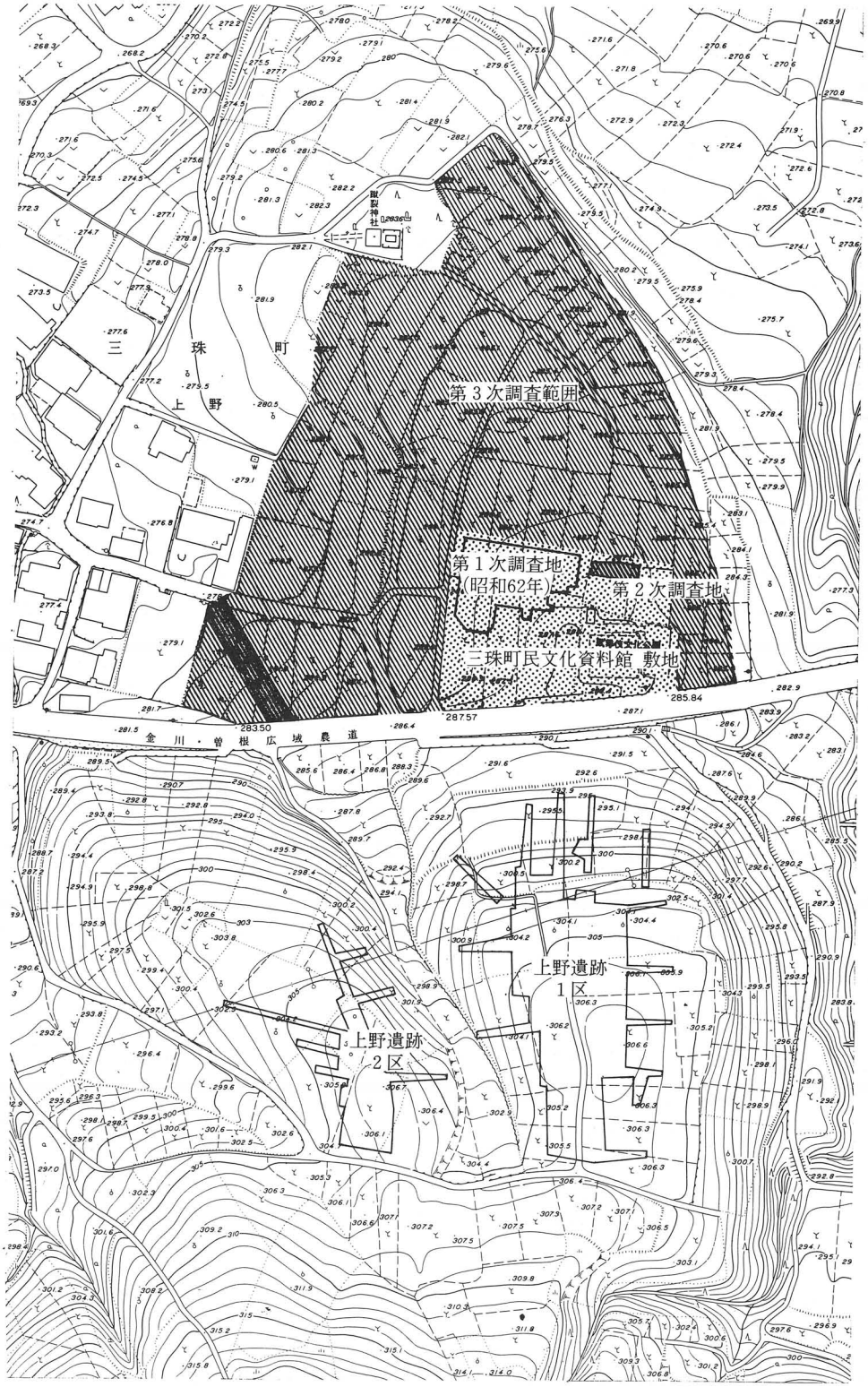
2、歴史的環境

一条氏館跡遺跡の所在する三珠町は甲府盆地の南西部上野地区に位置している。曽根丘陵は多くの遺跡や古墳が存在し従来から注目されてきたが、町内でもこの曽根丘陵を中心として幾つかの注目すべき遺跡が存在している。以下、これまで調査されてきた遺跡を中心として本町に係る歴史的環境を概観したい。

本遺跡ののる舌状台地の先端には武田信玄の弟にあたる一条信竜の居城・上野城があったと伝えられている蹴裂（けさき）神社がある。一条信竜には歌舞伎宗家の初代市川団十郎が仕えたとされ、本遺跡隣接地には歌舞伎文化公園および三珠町民文化資料館が造られている。

昭和45～47年にかけて農道整備事業が行われ、丘陵上段、標高370mの地に水呑場遺跡が確認された。この整備事業に伴ってローム層がカッティングされ、旧石器時代の石器や押型文土器などが出土した。さらに昭和63年にはこの付近が再度調査され、遺構の検出は少なかったものの縄文時代早期の土器のほか、同中期、古墳時代等の土器が出土し、このことから複合した遺跡であることが確認された（水呑場北遺跡⑨）。

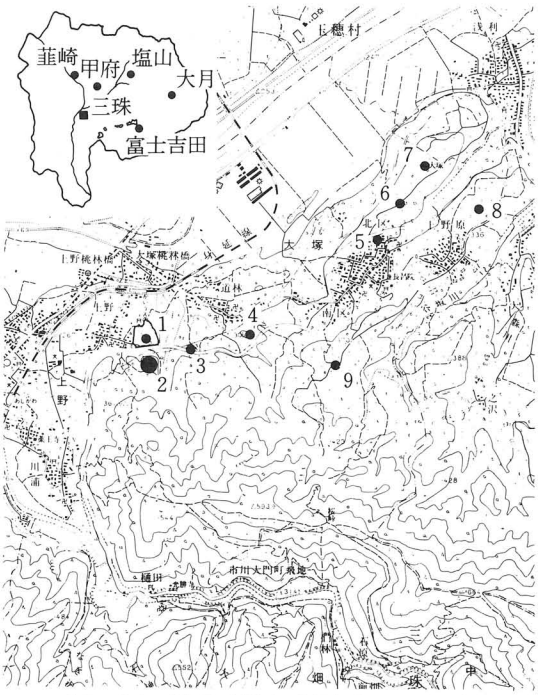
昭和47年には金川曽根広域農道建設に伴って大塚字上野原の上野原遺跡が緊急に調査された。遺物は縄文時代の前期末葉から中・後期のものが中心であったが、他に馬の刻線画が施された土師器蓋の破片も報告されている。さらに大塚西原地区には敷石住居址と見られる遺構⑤の存在が



第１図　遺跡周辺地形図〔1/2,000〕

伝えられているが、現在は果樹園の一角に僅かにその様相をとどめているにすぎない。

ついで弥生時代についてみると、金川曽根広域農道建設に伴って昭和53年に調査が行われた一城林遺跡③がある。弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺跡で、一条氏館跡遺跡とは谷をひとつ隔てた東側に位置し、竪穴式住居址６軒、溝２本等が検出された。なお昭和26年の調査によれば炭化米が発見されている。また、本遺跡の占有する台地より17mほど高い南側の台地には昭和63年に調査された上野遺跡②があり、弥生時代後期の住居址９軒が検出されたほか、盆地側に落ちる傾斜地に環濠とも見なせる溝が検出されている。



第２図　周辺遺跡分布図〔1/50,000〕

古墳時代に入ると丘陵地帯に前期古墳の分布が認められている。大塚地区には大塚古墳⑦、伊勢古墳⑥をはじめとして10数基の古墳が点在している。その中でも特筆すべきは鳥居原古墳⑧である。５世紀中頃の古墳と見られ、「赤烏元年銘」鏡が出土しており学会においても著名である。現在では朱が付着した河原石による葺石の一部を見ることができるが、古墳自体のプランは削平により不明である。先述した上野遺跡からは４世紀末と考えられる方形周溝墓と５世紀初頭と考えられる円形周溝墓が検出された。前者は山梨県内で古墳が出現した時期と前後する頃に造営され、後者は町内で鳥居原古墳が造られた直前に造営されたことが推測でき、当時の勢力分布を考察するうえで興味深い。これまでに古墳は上野地区には確認されておらず、東限は道林地区のエモン塚④とされていた。

一条氏館跡遺跡①は昭和62年の調査により、この丘陵上にも周溝墓群が存在するということが明らかになり、今回の２度にわたる調査はこの墓群の範囲を確認するうえで、また上野地区にも古墳が存在したことを明らかしたなどの貴重な成果を得ることができた。

（『一条氏館跡遺跡』に堀ノ内加筆）

II　第２次調査

１、調査に至る経緯と経過

三珠町では、平成２年度事業として三珠町歌舞伎文化公園内に公衆トイレを建設することとなった。同公園一帯は、昭和62年度（一条氏館跡遺跡）・63年度（上野遺跡）に調査され、県内でも有数な遺跡として周知されていた。そのため、町教育委員会では県教育委員会文化課の指導をえて、建設用地（約64㎡）内の発掘調査を実施することとした。

調査は、平成２年２月21日から同月26日まで６日間に亙って行われ、以下のように多くの成果を得ることができた。

調査担当者　清水　　博（櫛形町教育委員会）

調査参加者　土橋　通貴（三珠町文化財審議会委員）・石原　一恵・塩島冨美子・小林よ志子・内藤　真一・若林　初美

調 査 事 務　石原　　一（三珠町教育委員会）

２、遺跡の位置

遺跡は、一条氏館跡遺跡隣接地に存在し、広域農道をへだてて上野遺跡とも接している。本遺跡はこれら両遺跡と一体のものと考えられ、特に一条氏館跡遺跡とは同一の遺構群として把えられる。

３、調査の成果

調査区は64㎡と極めて狭小であったが、多くの成果を得ることができた。

（１）検出された遺構（第３図）

検出された遺構は４基を数え、すべて方形周溝墓であった。10～20㎝程の薄い耕作土の直下が遺構確認面であり、遺構の上面はかなり削平を受けていた。

①　１号方形周溝墓

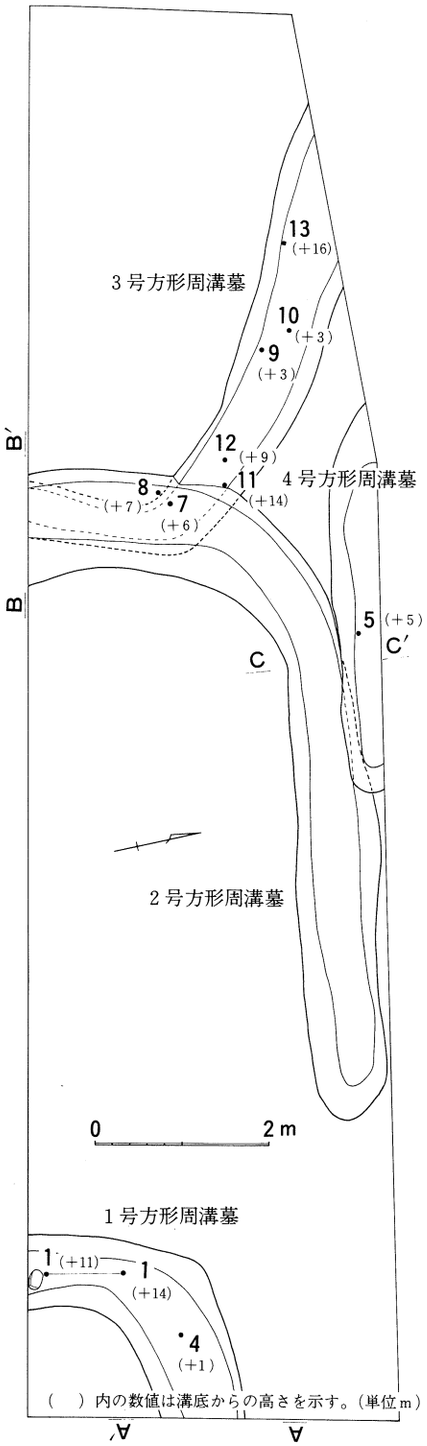
調査区東端から遺構の北西隅が検出された。周溝の幅は80㎝・深さは15㎝を残すのみであった。

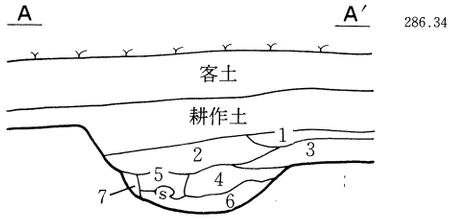
②　２号方形周溝墓

調査区中央から遺構の北半１／３ほどが検出された。北溝と西溝の一部は確認されたが東溝は検出できなかった。周溝の幅は1.2m、深さは60㎝ほどを測る。西溝を３号方形周溝墓にきられ、北溝で４号方形周溝墓をきっている。復元すると一辺８～10mの規模であろう。

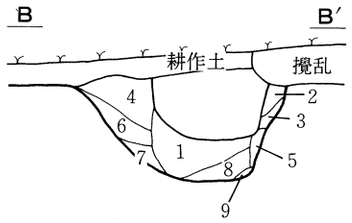
③　３号方形周溝墓

調査区西端から検出され、遺構の東北隅が確認された。周溝の幅は60～80㎝、深さは40㎝

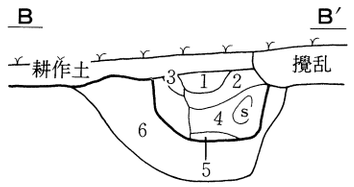




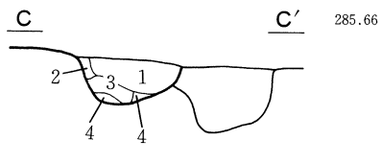
1号方形周溝墓セクション（A—A′）
第1～4層：攪乱（4層に炭化物混入）
第 5 層：暗茶褐色土層（粘性弱、しまり弱、ローム粒少量混入）
第 6 層：黄茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒多量混入）
第 7 層：黄茶褐色土層（粘性強、しまり強、ローム粒混入）



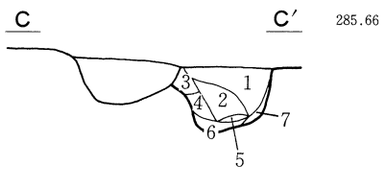
2号方形周溝墓セクション（B—B′）
第1層：暗黄褐色土層（粘性有、しまりやや有、ロームブロック混入）
第2層：暗黄褐色土層（粘性無、しまり無、ロームブロック混入）
第3層：黄褐色土層（粘性有、しまり無、ローム主体層）
第4層：黄褐色土層（粘性やや有、しまり無、ローム粒多量混入）
第5層：暗黄褐色土層（粘性有、しまり無、ローム粒混入）
第6層：黄褐色土層（粘性やや有、しまり無、ローム粒、ロームブロック混入）
第7層：暗黄褐色土層（粘性やや有、しまり無、ローム粒混入）
第8層：暗黄褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒少量混入）
第9層：黄褐色土層（粘性有、しまり有、ローム主体層）



3号方形周溝墓セクション（B—B′）
第1層：黒黄褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒多量混入）
第2層：黒黄褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒混入）
第3層：黒褐色土層（粘性無、しまり無）
第4層：黒褐色土層（粘性無、しまり無）
第5層：黒褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒混入）
第6層：黒黄褐色土層（粘性無、しまりやや有、ローム、茶褐色粘質土混入）



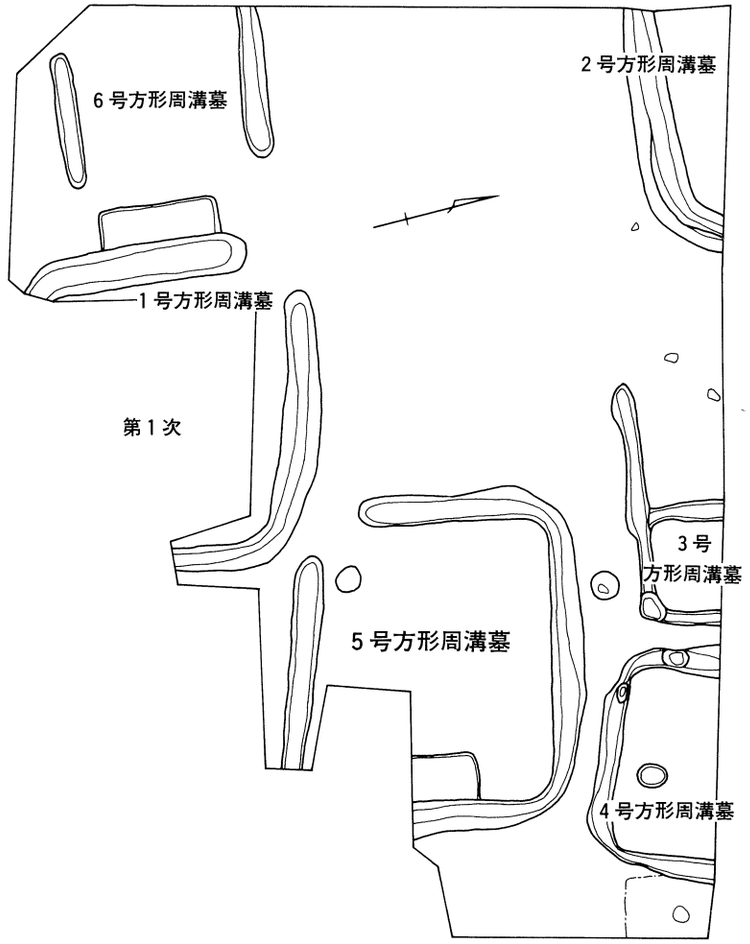
2号方形周溝墓セクション（C—C′）
第1層：暗茶褐色土層（粘性やや有、しまりやや有、ロームブロック混入）
第2層：黄褐色土層（粘性有、しまり有）
第3層：暗黄褐色土層（粘性有、しまりやや有、ロームブロック少量混入）
第4層：黄褐色土層（粘性強、しまり強）

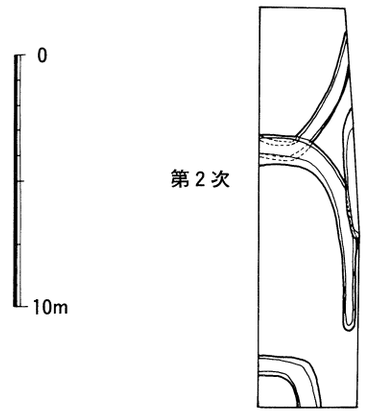


4号方形周溝墓セクション（C—C′）
第1層：暗黄褐色土層（粘性やや有、しまり無、ローム粘混入）
第2層：暗黄褐色土層（粘性やや有、しまり無、ローム粘多量混入）
第3層：黄褐色土層（粘性やや有、しまり有、ローム主体層）
第4層：黄褐色土層（粘性やや有、しまり有、ローム多量混入）
第5層：暗黄褐色土層（粘性無、しまり無、ロームわずかに混入）
第6層：黄褐色土層（粘性強、しまり有、ローム主体層）
第7層：黄褐色土層（粘性強、しまり有、ロームブロック多量混入）

0 1 m

第3図　第2次調査遺構平面図〔1/80〕・土層断面図〔1/40〕





第4図　第1次・第2次調査区配置図（1/300）

程であった。東溝は２号方形周溝墓の西溝埋土をきって構築されている。

④　４号方形周溝墓

調査区北辺中央から検出された。南溝の一部と、南西隅部がわずかに確認されたのみである。周溝の幅は60cm、深さ40cmほどで、全体の規模は、小型のものであろう。

（２）出土した遺物（第５図）

前述したように本遺跡は、上部に削平を受けていたため遺構の遺存状態が悪く、遺物も小量出土したのみであった。

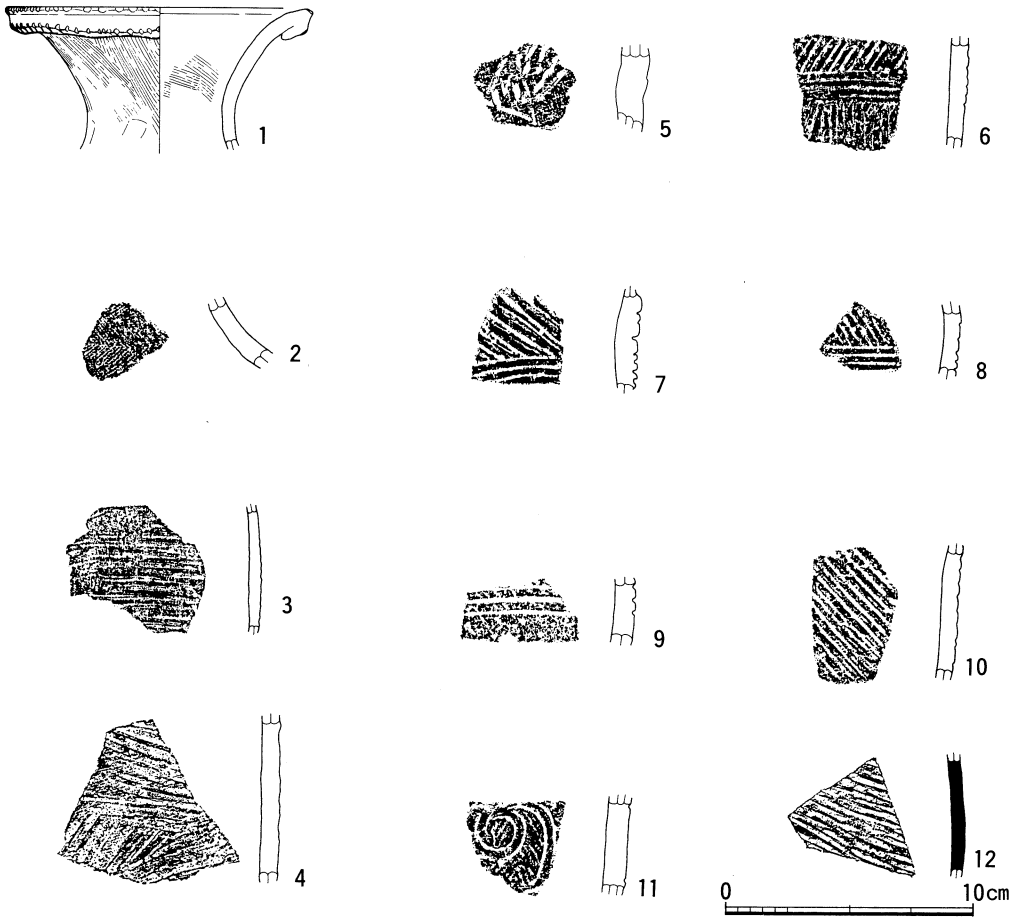
以下、簡単に説明したい。

１．壷の頸部から口縁部で２／３ほど現存する。口縁部径12.2cm、頸部径６cmを計る。頸部は直立し、ひらきながら口縁部に至る。口縁部は折り返され、粗く面取りされた後刻み目がほどこされる。頸部外面上半は粗い斜方向のハケ目が施され、同下端は胴部に向けヘラナデが施されている。内面は斜方向のハケが施され、上半はのちていねいにナデられている。胎土は緻密で、多量の砂粒と僅かに雲母・長石含む。焼成は良好で、色調は淡橙褐色を呈する。１号方形周溝墓の周溝底部より10cm程浮いて出土した。２．壷頸部から肩部破片。２段の細かい羽状縄文が施される。胎土は普通で多量の長石を含む。色調は赤褐色を呈する。確認面出土。３．壷胴部破片。内外ともに横方向の条痕が施される。胎土は密、色調は橙褐色を呈する。４号方形周溝墓出土。４．壷胴部破片。横から斜方向の粗い条痕が施される。胎土は密、色調は暗赤褐色を呈する。１号方形周溝墓出土。５．深鉢破片。斜位の沈線、押引き文が施される。胎土に長石を含み、色調は赤褐色を呈する。６．深鉢胴部破片。４本１単位の横位の沈線が巡り、その上位を斜方向、下位を縦方向の平行沈線が施される。胎土に雲母・長石を含み、色調は赤褐色を呈する。７．深鉢胴部破片。平行沈線の上位に斜位の沈線を施す。胎土に白砂粒・金雲母を含み、色調は淡褐色を呈する。８．深鉢胴部破片。横位の沈線帯の上位に斜方向の平行沈線が施される。胎土に金雲母を含み、色調は、赤褐色を呈する。９．深鉢胴部破片。浅い沈線に横位の平行沈線を施す。胎土に雲母・長石を含み、茶褐色を呈する。10．深鉢胴部破片。斜位の平行沈線が施される。胎土に白砂粒・金雲母を含み、色調は褐色を呈する。11．深鉢胴部破片。縄文地に２本の平行沈線によるワラビ手状の文様を施す。胎土に白砂粒・金雲母を含み、色調は茶褐色を呈する。12．須恵器甕胴部破片。斜位の叩き目が施される。胎土は密で色調は灰色を呈する。

５は表採品、６から12は周溝墓覆土中から出土した。

１～２は弥生時代後期終末の所産、３・４は弥生時代中期の所産である。

５は縄文時代早期中葉の、６から11は同前期前葉の所産である。12は古墳時代後半のものであろう。



第５図　第２次調査出土土器〔1/3〕

４、小結

以上の様に、今回の発掘では僅かな面積でありながら４基の方形周溝墓を検出した。時代的には弥生時代終末のものである。一条氏館跡遺跡、上野遺跡等、この台地上に占地する方形周溝墓群の中でどの様な位置を占めるかは今後の検討課題としたいが、ともあれ本周溝墓群の解明に一石を投じたものといえよう。

（以上、清水）

Ⅲ　第３次調査

１、調査に至る経緯と経過

第３次調査は仮称「歌舞伎公園」造成に先立つもので、第１次、第２次の調査結果を踏まえ、広範囲にわたる公園対象敷地内の埋蔵文化財の有無・分布の状況・遺構の性格と時期を明確にし、さらに平成３年度に行われる本調査についての資料を得るために実施された。

一条氏館跡遺跡は昭和62年８月に最初の調査がなされ、遺跡の名称になっている館跡に関係する遺構の検出はなされなかったものの、６基の方形周溝墓を確認したため、山梨県の弥生時代後期後半における墓制を研究するうえで非常に重要な遺跡であることが認識されている。さらに昭和63年６月に終了した本遺跡の南側の台地に所在する上野遺跡からは、本遺跡の方形周溝墓に対応すると考えられる住居址が検出され、加えてこの集落には環濠と見なせる施設が設けられていること、さらにこの集落以後９点（以上）の供献土器を持つ方形周溝墓が造営されていたことなどから、中道町以外の地域での弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭にかけての有力な豪族の存在が当地に認められることとなった。

調査は平成２年12月10日に開始し、同月28日に終了した。公園予定敷地の総面積は15,679㎡で、これに25mメッシュのグリッドを設定し、重機により試掘坑をいれた。試掘坑は25のグリッドに配置され、人力によるサブトレンチまで含めた調査面積は約1,000㎡であった。

調査担当者　　堀ノ内泉（塩山市教育委員会）

調査参加者　　土橋通貴（三珠町文化財審議会委員）・板垣和子・小林よ志子・込山　豊・塩島冨美子・諏訪節子・丹沢町子・森田さつ子・山本まつ子・若林初美

調査事務　　石原　一（三珠町教育委員会）

２、遺跡の位置

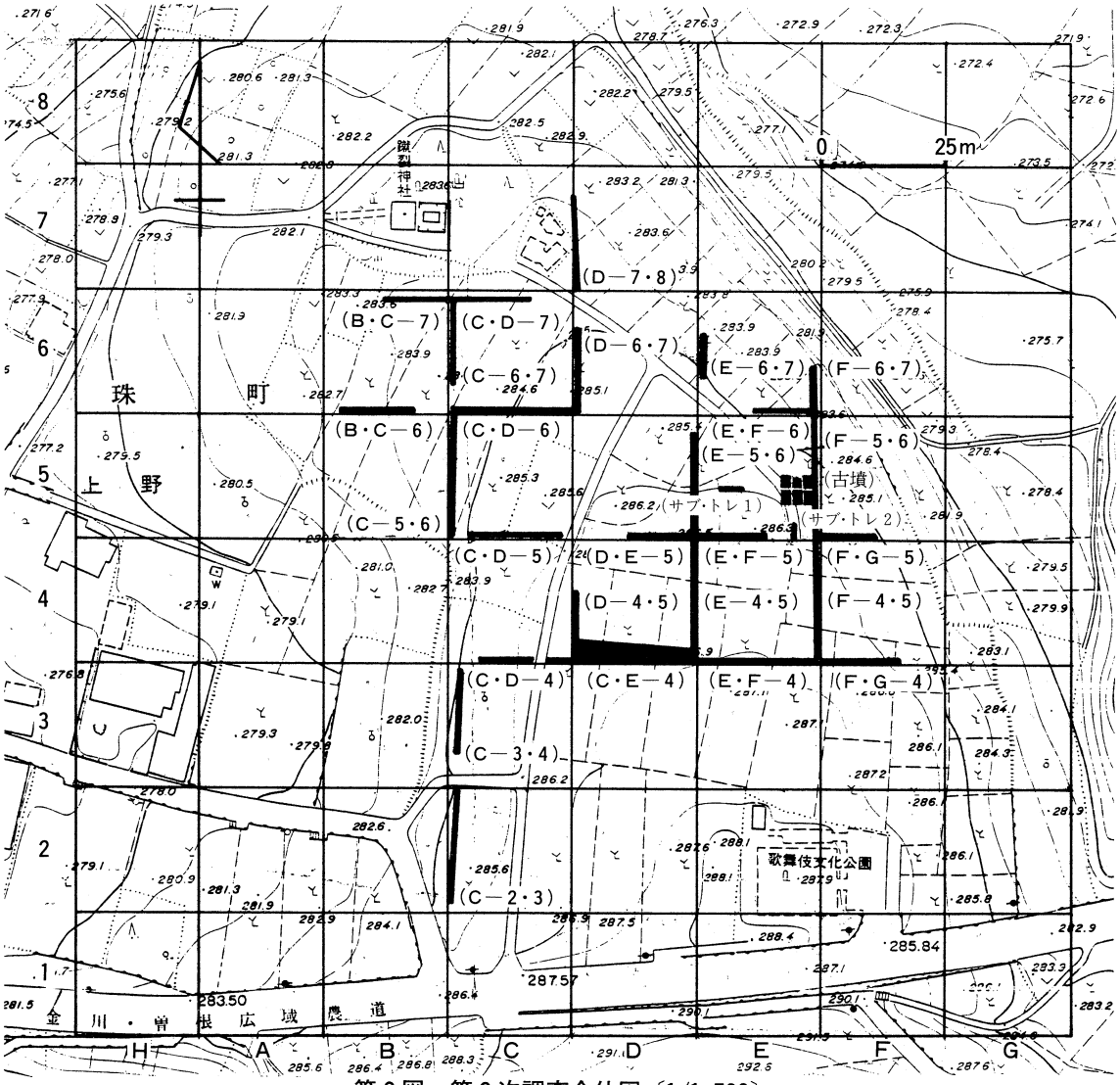
２次調査地が一条氏館跡遺跡の東に隣接しているのに対し、３次調査地は北側の盆地に向かい展開する台地の平坦面がほぼすべて該当する。この台地の最北部には蹴裂神社があり、神社の敷地から北は緩やかに落ちていく。

一条氏館跡遺跡に近接する北側は同一の遺跡と考えられ、同時期の遺構群が検出されると予測できたが、その他の地区については存在する遺構の性格・時期等は全く不明であった。

３、調査の方法

調査区は15,000㎡を越える試掘の面積は約1,000㎡であった。平面的に遺構の総てを検出できたものはなく、さらに調査期間が限定されていたため精査した遺構もない。

調査方法は調査区全体に25m方眼をかけグリッドを設定し、それに従って重機により試掘坑を入れた（第６図）。試掘坑の幅は概ね1.5m～２mを測る。これを遺構検出し、検出された遺構は



第６図　第２次調査全体図〔1/1,500〕

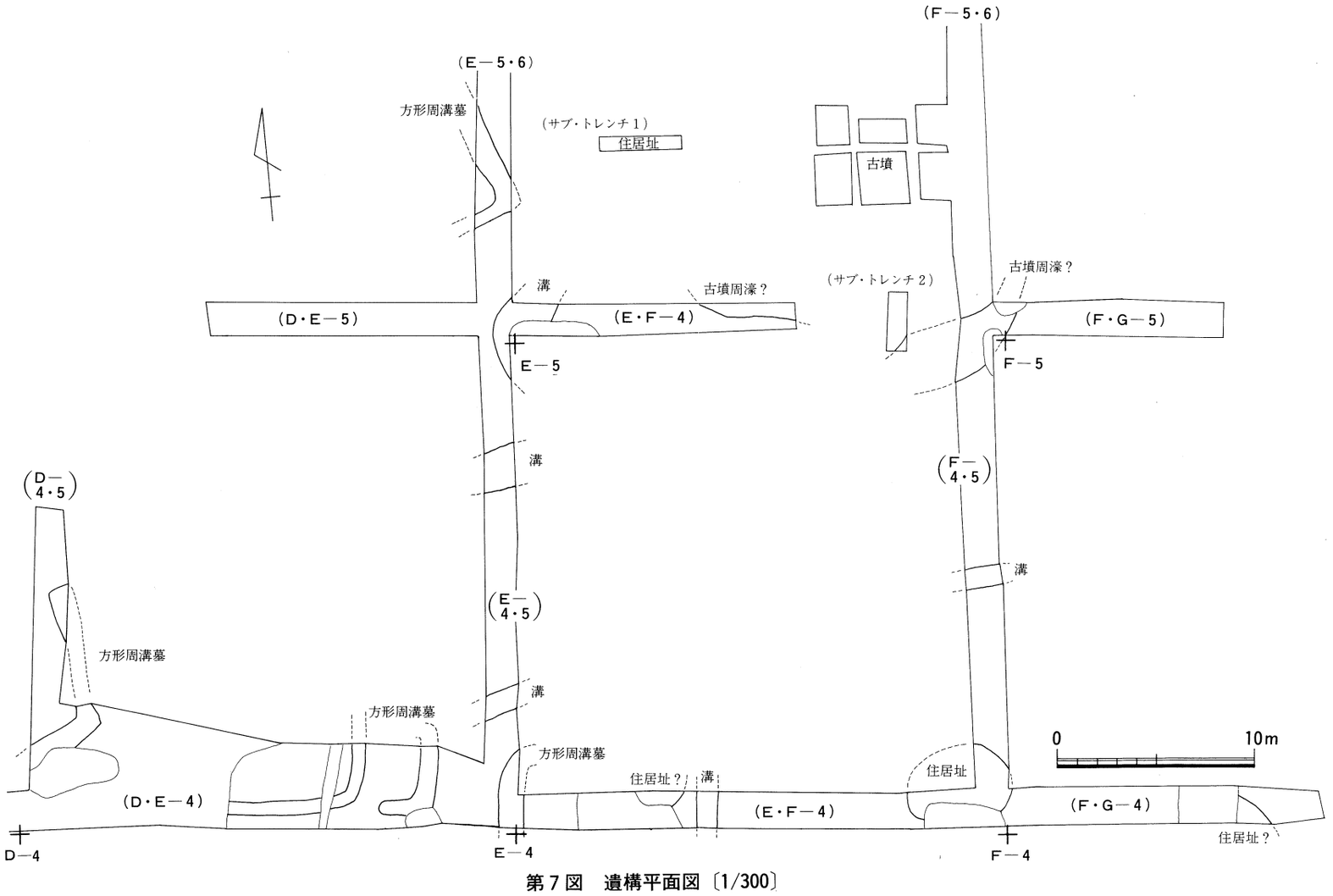
写真撮影の後１／100の平面図で記録した。

４、調査の成果

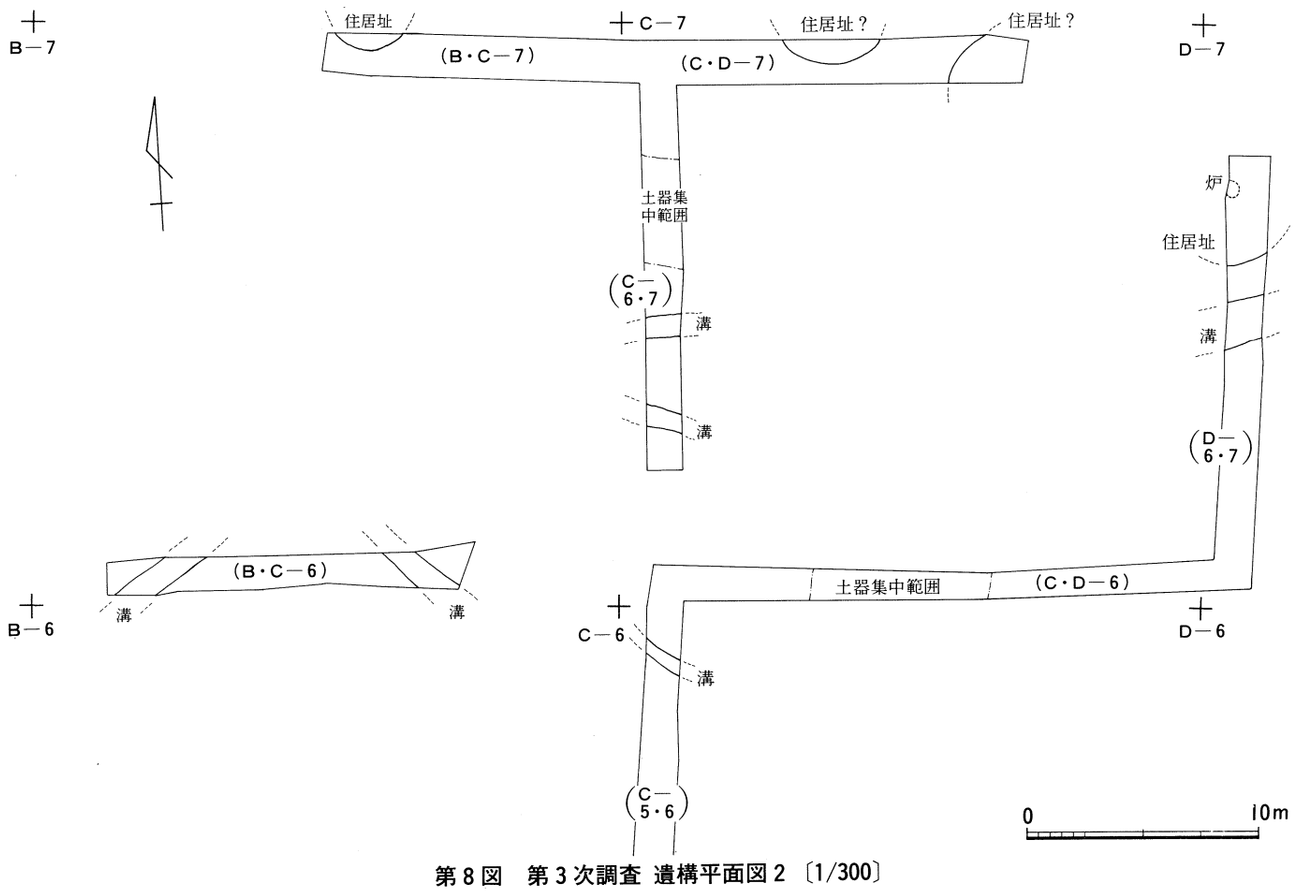
先述の通り総てを検出した遺構も精査した遺構もないため、土の表面に現れた人為的な痕跡もそのまますぐ遺構であるとは信用できず、記録した中には近年の耕作によるもの等も多々含まれているであろう。

（１）検出された遺構（第７・８・９図）

掘って調査することができなかったため、不確定な遺構が多い。特に溝状遺構などはかなり広い範囲にわたり検出されているが、堆積している土の様子、あるいは推定される形状、出土した土器の状態や出土量などから遺構と判断している。



第7図　遺構平面図〔1/300〕



第8図　第3次調査 遺構平面図2〔1/300〕

調査地は総て畑であったため、地表から５～60cmは耕作土であり、その直下に遺構確認面がある。耕作土は北側では若干薄く、耕作による遺構上面の破壊は全域で見られた。

① 方形周溝墓

Ｄ－４グリッド・Ｄ－５グリッドで５基確認された。規模的には１辺10m程度、あるいはそれ以下の中・小規模の方形周溝墓であると見られる。位置的には資料館北側30mくらいまでの範囲に、未確認のものを含めて密集していると思われ、１次・２次調査の際に検出された方形周溝墓群と同一の墓群であろう。

② 住 居 址

４軒検出された。検出されたのはＥ－４グリッド（Ｅ・Ｆ－４試掘坑）、Ｅ－５グリッド（サブトレンチ１）、Ｄ－６グリッド（Ｄ－６・７試掘坑）およびＢ－６グリッド（Ｂ・Ｃ－７試掘坑）であるが、Ｄ－６・７試掘坑からは焼土を伴う炉跡が、サブトレンチ１からは石組の炉跡が検出されている。時期的には縄文時代前期、同中期初頭、同中期中葉程度に分かれそうであるが、その他の時代の住居址の存在も考えられる。これらの地区の周辺には未確認の住居址が多数あるものと思われる。

③ 溝

調査区の広い範囲で検出されているが、精査のために掘ったわけでなく、幅２mの試掘坑に断片的に検出されているため、今後正式な調査を経る必要がある。

④ 古　　墳

Ｅ－５グリッドでその石室を検出した。復元される石室の規模は２×６～７mほどで、東に開口していると思われる。保存状況は非常に悪く、検出されたのは石室の基礎に近い部分で、巨大な石組の周辺には隙間を埋める小石が密集している状態であった。

試掘坑には古墳の周濠と考えられる遺構が検出されているが、古墳に付随するものとは断定できない。また、石室の周辺はロームがブロック状に混入されている黒色土層（Ｉ）が認められ、さらにそれを覆う形で黒褐色土層（II）が検出されていることから、大きく掘り下げた後石を積んでいき石室を造り、外側に綿密に土をかぶせて石を固定してからマウンドを作ったと考えられる。

（２）出土した遺物

① 土器・石器・その他（第11・12・13・14図）

土器が出土した試掘坑は18を数える。

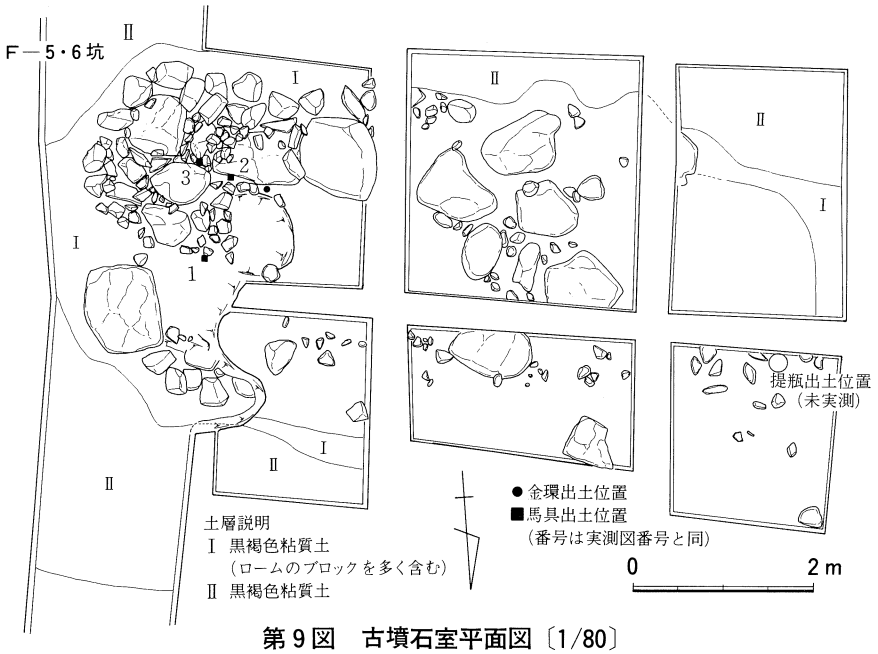
［Ｃ・Ｄ－４（１～４）］ 縄文時代前期の羽状縄文のものと中期中葉のもの数点。

［Ｄ・Ｆ－４（５～10）］ 縄文時代中期の他、弥生時代後期の壺形土器、須恵器が出土している。

［Ｅ・Ｆ－４（11～20）］ 縄文時代前期の土器が大半を占める。

［Ｆ・Ｇ－４（21～29）］ 縄文時代中期であるが、地文として縄文のものと平行沈線のものと分れる。

［Ｃ・Ｄ－５（30～32）］ 縄文時代中期の土器が少量出土している。



第９図　古墳石室平面図〔1/80〕

［D・E－5 (33～36)］　縄文時代前期・中期、および中世の皿が出土している。

［E・F－5 (37～41)］　縄文時代前期・中期が少量出土している。

［B・C－6 (42～44)］　縄文時代中期が少量出土している。

［C・D－6 (45～57)］　縄文時代中期が大半を占める。比較的出土量も多い。

［B・C－7 (58)］　図化し得たのは１点のみ。

［C・D－7 (59)］　図化し得たのは１点のみ。底部。

［D－4・5 (60～62)］　弥生時代後期の壺形土器が１点含まれる。

［E－4・5 (63～64)］　須恵器と中世の皿である。

［F－4・5 (65～72)］　縄文時代前期・中期および弥生時代前期の土器が出土している。

［C－6・7 (73～97)］　少量の縄文時代前期、および中期の土器が出土した。土製円盤が１点含まれる。調査した試掘坑中最も出土量が多い。

［D－6・7 (98～107)］　縄文時代前期・中期の土器が出土している。

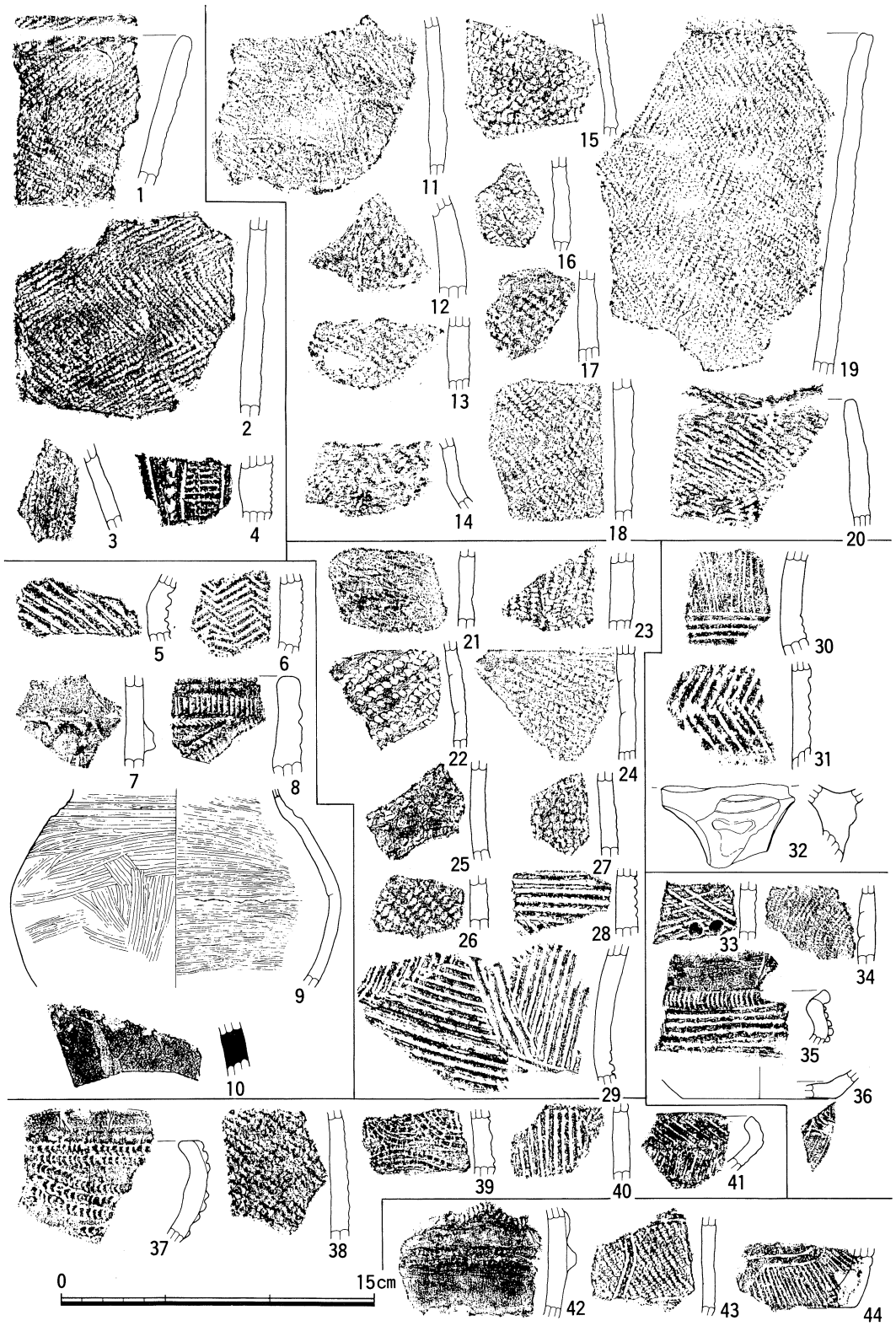
［サブトレンチ１ (108)］　縄文時代中期の土器が１点出土した。住居に係わるものか。

［古　墳　(109～111)］　須恵器２点、および古墳時代後期の高坏形土器が出土している。他にも出土しているが復元・図化していない。

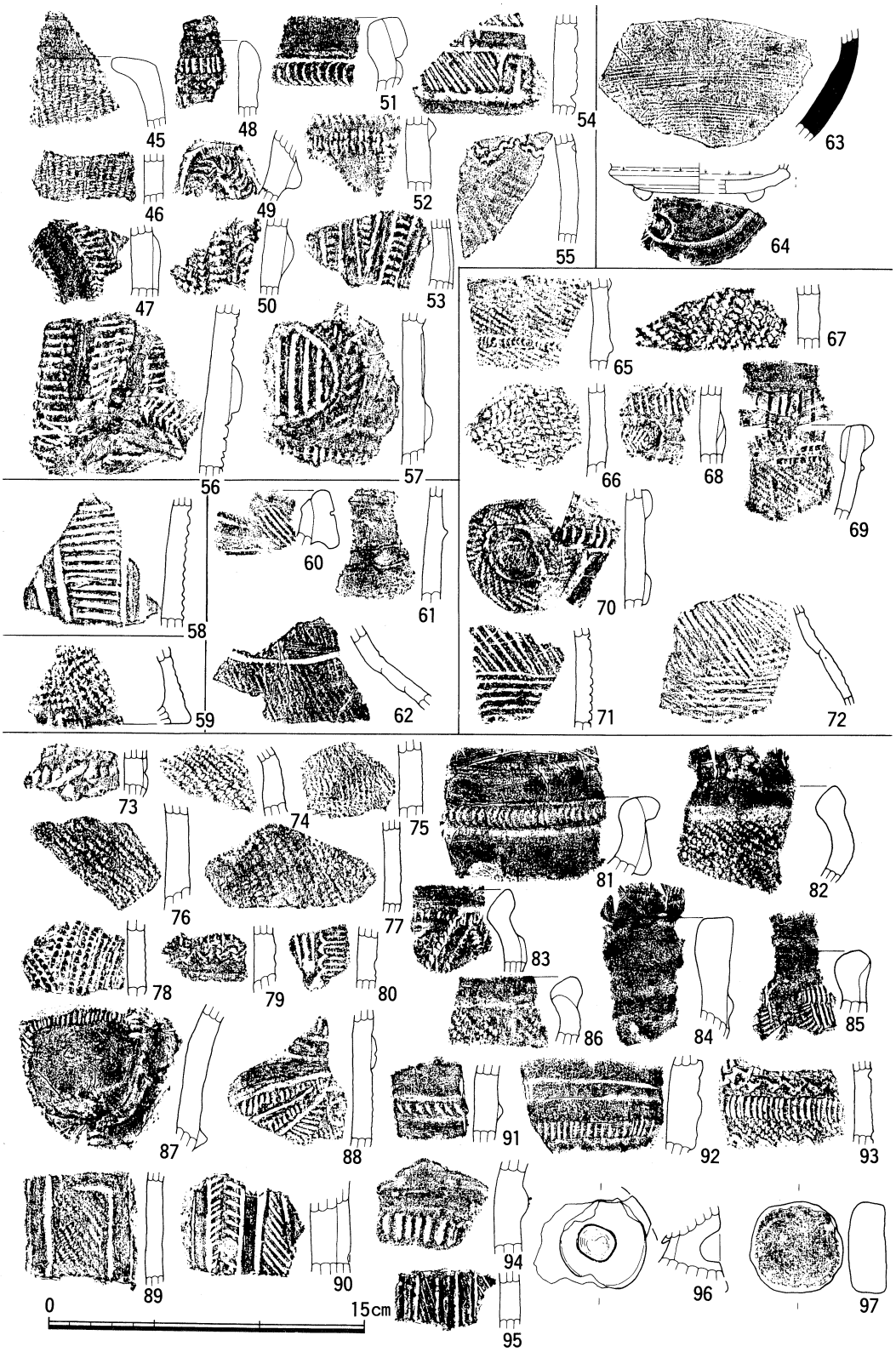
石器の出土量は４点と少ない。

１．E・F－5出土打製石斧。上半を欠損する。２．古墳出土石匙。刃部７cmを測り大型の石匙である。３．C－6・7出土石鏃。４．D・E－4出土敲石。３面に痕跡を残す。

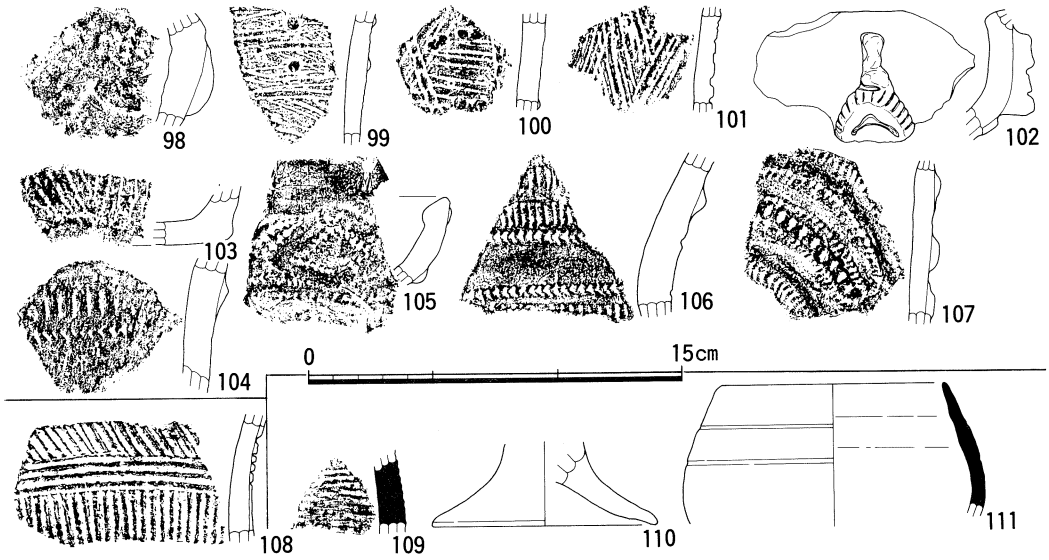
その他の遺物として古銭が１枚ある。「寛永通寶」でB・C－6試掘坑より出土した。



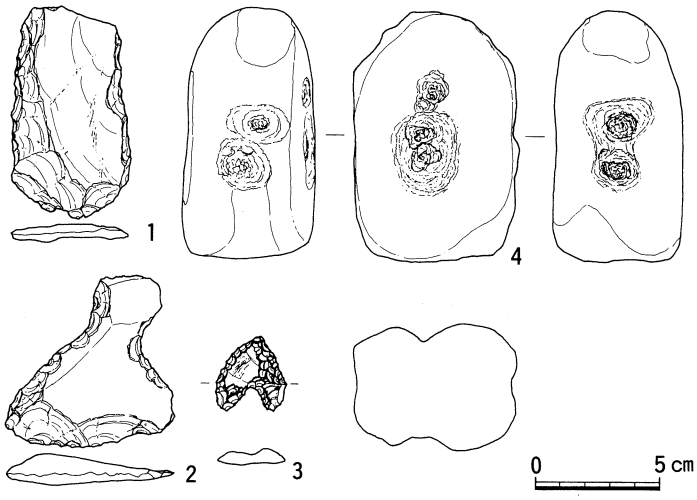
第10図　第３次調査出土土器１〔1/3〕



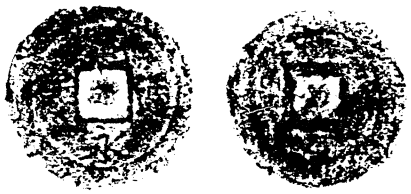
第11図　第３次調査出土土器２〔1/3〕



第12図　第３次調査出土土器３〔1/3〕



第13図　第３次調査出土石器〔1/3〕（3のみ2/3）



第14図　古　銭〔1/1〕

② 古墳出土鉄製品

a　馬具　轡・鉸金具等５点出土している。

轡（第15図１）　ほぼ完存する轡である。銜は２連で、素環の鏡板に板状の立聞がつく。引手は１本引手で先端は40°ほど屈曲する。

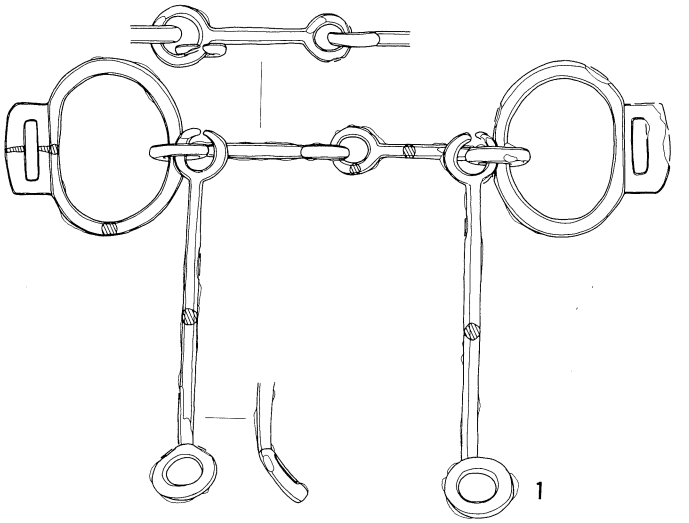
鐙鞍（第15図２・第15図３・４）　２は鐙への取付金具を除いてほぼ完存する。鉸金具に３連の兵庫鎖がつくものである。３の鉸金具は形態・大きさとも２のものと同一で対をなすものであろう。４は鐙への取付金具で２本鋲で取り付けるものである。

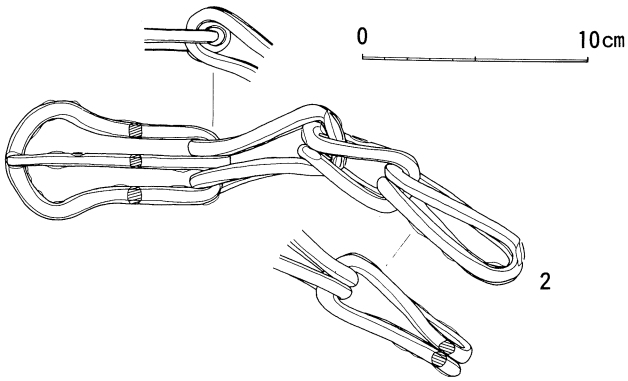
b　火打金（第15図５）　ほぼ完存する小型の製品である。

c　刀子（第15図６・７）　ともに残片である。６は身部の一部、７は茎部と思われる。

d　不明鉄製品（第15図８～10）　８は一端が欠損する。板状の鉄の先端を湾曲させたもの。９は断面方形を呈する棒状鉄器。両端とも僅かに屈曲する。10は錆による膨張が著しい。

③ 古墳出土装身具（第16図）





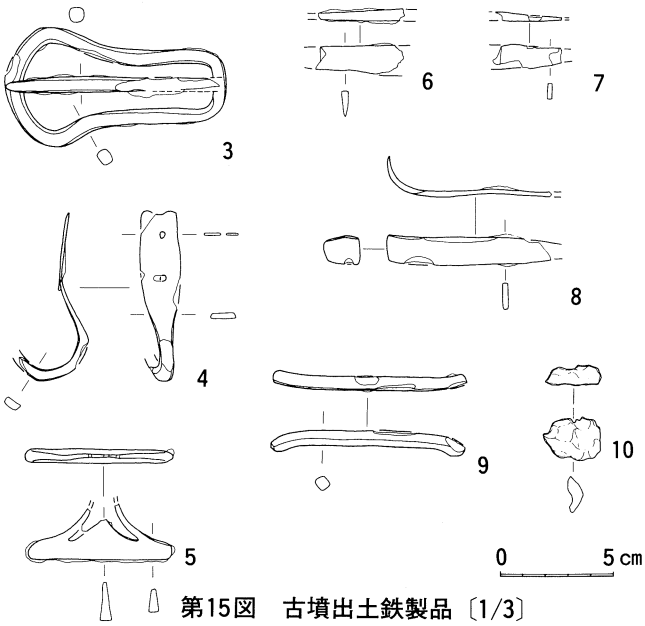
1は算盤玉　水晶製で長さ1.5cm。穿孔は片側から行われ、一方は面取りが施される。

2は金環　径2.5cmで、断面は整った隅丸方形を示す。

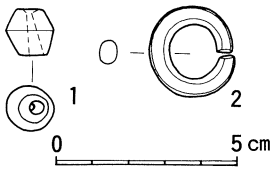
④　トレンチ内出土鉄製品（第17図）

1は楔　長さ8cm程で、幅1.8～0.8cm。頭部は1cmほど折曲げて作り出される。先端は使用のためかかなり摩耗している。

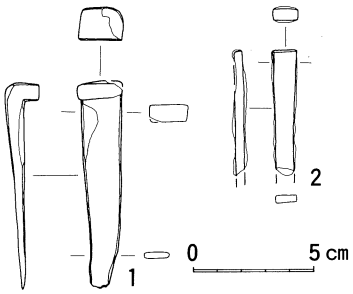
2は不明鉄製品　断面長方形の棒状を呈し一端は欠損している。完結している側がやや太く刀子・鏃類の茎部とも思われない。



第15図　古墳出土鉄製品〔1/3〕



第16図　古墳出土装身具〔1/2〕



第17図　試掘坑出土鉄製品〔1/3〕

5、小　　結

15,000㎡を越える広大な予定地の試掘調査を実施したが、２週間という期限の中で得られた情報は僅かである。それによると推測の域を越えないものの、昭和62年度に調査した一条氏館跡遺跡の範囲がある程度確認できたこと、地点が変わると遺跡の時期・性格も変わってくるのであろうこと、さらに台地上にはこれらの遺構が広く分布していることなどが分かった。本調査を実施するうえで貴重な資料となるため、当初の目的はクリヤーできたと考えている。

今回の調査の成果で最も大きいのは、古墳を確認できたことである。石室を確認し出土品として須恵器と馬具を得たことにより６世紀末から７世紀初頭の造営と考えられる。

三珠町内の古墳の分布を見ると大塚地区に集中（大塚古墳群）しエモン塚が西限の古墳と認識されていた。時期的には５世紀中頃の鳥居原古墳が造られその後６世紀の前半までに町内の古墳は造営されたと考えられるが、さらに７世紀に入ってからも町内では古墳の造営が続けられたことになる。大塚古墳群との関係は場所的なことや時期的なことを考えた場合、両者を結ぶのは非常に困難であるが、石室は東に開口しておりその延長にはエモン塚があることに注目すると、小規模ながらも一つのグループとして捕らえることも可能かと考える。ただし、エモン塚に関する資料・情報は極めて少なく、今後の調査に期待したい。

（以上、４－⑵－②～④清水、それ以外堀ノ内）

Ⅳ　ま と め

第１次調査で確認された一条氏館跡遺跡の方形周溝墓群は、今回２度にわたる調査により範囲がより明確になってきた。それぞれの規模も、概ね一辺10m程度と考えられ、第一次調査の報告中の「中型（９～10m）のもの」（参考文献３）と一致し、これを超える規模のものは、少なくとも第３次調査では検出されなかった。墓域としては資料館の北約30m、Ｄ－４、Ｄ－５グリッドまでが充てられよう。この墓域に対応する集落は、現在のところ昭和63年に調査された上野遺跡や昭和55年の一城林遺跡の集落が考えられるが、資料不足の感があるためまだまだ今後の調査に頼る部分が多い。

また、３次調査では方形周溝墓以外の遺構の存在も確認され、特に古墳の検出は特筆すべき成果であった。残念ながら破壊された石室の基部を検出したに過ぎないが、石室の規模は掘り方を検出することによって復元できると考えられる。

住居址も台地の北から東にかけて多く存在するものと見られる。時期的には縄文時代前期、同中期等と思われるが、弥生時代前期および後期の土器も若干出土しているため、これらの時期の住居址の検出も期待できる。

出土した土器を見ると、昭和62年に調査した際に比較的多く出土した縄文時代早期鵜ケ島台式の出土量が非常に少なく、変わって前期黒浜式併行と考えられる羽状縄文の出土量が多い事に気付く。また、第１次調査の際にも期待された、遺跡名にもなっている「一条氏館跡」に関するよ

うな中世に属する土器等の遺物は極めて少なく、館跡は蹴裂神社以北の、台地の先端部に求めた方が良いようである。ただ、第３次調査で検出された多数の溝（状遺構）がはたして中世の館に関するような施設なのかは発掘調査の結果を待ちたい。

第１次調査地・第２次調査地はすでに建物があり調査も十分に実施したため特に問題はないと思うが、第３次調査地は面積が広く遺構の分布密度も濃いため、それに見合う発掘調査と遺跡の価値を損なわないような公園整備を望む。

参考文献

1、『三珠町誌』　三珠町教育委員会

2、『一城林遺跡』　1981　山梨県教育委員会

3、『一条氏館跡遺跡』　1988　三珠町教育委員会

4、『上野遺跡』　1989　三珠町教育委員会

5、『花鳥山遺跡・水呑場北遺跡』　1989　山梨県教育委員会　他

一条氏館跡遺跡全景（南から）

一条氏館跡遺跡

—山梨県三珠町一条氏館跡遺跡第２・３次発掘調査報告書—

平成３年３月31日　発行

編集・発行　三珠町教育委員会
〒409-36 山梨県西八代郡三珠町上野2714
Tel.0552-72-1201

印　　刷　デザインオフィスWITH
〒400　山梨県甲府市大里町3727-4
Tel 0552-41-4242